

奇しくも

第8期生 石田 陽一朗

同期にも今まであえて話そうとはしなかったが、私は小野ゼミを辞めようと思っていたことがある。それは、入ゼミ試験の当日である。周りの意識の高さや知識や経験の豊富さに、そして、試験科目である小野先生との面接で考えの甘さを徹底的に叩かれ、なけなしの自信を砕かれた私は、「俺はここに来るべきじゃなかった」と、その場にいること自体に耐えられなかった。寒い待合室で楽しく喋っている同級生の傍ら俯いたまま、「合格しようがしまいがどっちでもいい、早くここから立ち去りたい」と心の中で叫んでいたのを覚えている。しかし、入ゼミ試験に合格してしまい、その後の新歓コンパで初ケースのメンバーと連絡先を交換し、翌日に集まることになってしまった。だが、その時も私は本気で次の日にでも小野先生に合格取消の旨を伝えようと考えていたのだ。ところが、「辞めよう」という気持ちは翌日のケースの集まりでキレイさっぱり消え去っていた。初ケースのメンバー、荻野・我田は本当に愉快で楽しく、優しく、私の支離滅裂だったであろう話も真剣に聞いてくれた。試験当日は完全に心砕かれていた私だったが、マーケティングの勉強は意外にも楽しく、何より良き同期に支えられ思ったよりも小野ゼミでやっていけるかもしれないと感じたのだ。むしろ、小野ゼミを辞めたら本当に行く場所が無くなるとさえ感じた。その瞬間、私は、小野ゼミに入れたことを機会と捉え、ここで頑張ってみようと思いついた。3年生の間は春を除きサークルの演奏活動を完全に休止し、小野ゼミの活動に専念したつもりだった。

私は今まで、自分の人生における重要な決定を人任せにしてきた。自分で自分の進路について真剣に考えることをしなかった。特に目標もなく何となく大学に入ってしまい、ナアナアな日吉時代を過ごしてきた私は、文字通り「残念」な学生であった。そんな私が、小野ゼミに入ったからと急に努力するようになるのは難しかった。私は今まで何度小野ゼミで「本気」になろうと決意しただろうか。基礎文献レポートは、初回は提出出来ず、その後も適当な考察を書いて何度先輩から叱られたか分からない。三田論プロジェクトでも、課された個人ワークを完遂出来ずに仲間から総スカンを喰らったことが多々あった。そして、「この日までにやってきます」と宣言したのにやってこれず、何度小野先生を裏切ったことがあるか。その度、私は、明日からは心を入れ替え本気になろうと決めてきたが、結局、私の本気が続いた時など無かっただろう。覚悟が足りなすぎた。しかし、これからの就職、その決定はひたすら考え私が初めて自分自身で出した答えであるように思う。そう、小野ゼミは私の一生の中で大きな転機を与えてくれた大切な場所だった。最後に、こんな私でも2年間愛想尽かさずに付き合ってくれた同期、多大なご指導をくれた大学院生・先輩方、熱心なご指導に加え「これ以上ない」という程多くのモノをくれた小野先生には、感謝してもしきれません。本当に本当に、有難う御座いました。これからもどうぞ宜しくお願い致します。